

と先、何十年後かにならないとわからない。そういう難しさがあります。

森と人をつなげたい

森について学んだことを北海道で実践しようと、下川町森林組合に就職しました。ここでは現場での仕事だけではなく、産業クラスターのビジネスモデル事業として、トドマツのエッセンシャルオイルの製造・販売や、トドマツ、カラマツの炭を住宅用・農業用に売り込むなど、木材の新たな需要の掘り起こしも

担当しました。その後、旭川に縁があり、いろいろなメンバーとの出会いもあって、森林組合を辞めて、「NPO法人 森林再生ネットワーク北海道(略称「もりねつと北海道」)」を、06年12月に立ち上げました。

もりねつと北海道の活動を通して皆さんに伝えたいことは、「森を大事に使う」ということです。都会の



旭川市と比布町の境界にあり、豊かな森が広がる里山、突哨山の全景(陣内さん写真提供)

人は「森がなくても生きていける」と思っているようですが、いろいろな意味で私たちは森にお世話になっています。なぜなら、空気、水、土、生物は、森によって保たれているのですから。日本は莫大な量の木材を消費していますが、国土の7割が森林という割合に自国の森の活用率は低いのです。要するに、木材を輸入して外国の森を食いつぶしているのです。これは先進国の中で特殊な例です。ですから、外国の森も大事にしていく、自分たちの森もきちんと管理して少しずつその恵みを分け

てもらおうということがあります。森を守るといことは、上手に切つて、使うことです。みんなで大事に使うということがすごく大切なことだと思います。「みんなを使うからには、みんなで責任を持つ」と、そのためには「森のことをもうちょっと知らなければね」ということです。もりねつ

と北海道では、「森に行つてみよう」、「森を好きになろう」という活動もやっています。

今年3月、

旭川市にある突哨山の指定

管理者になりました。突哨山は、春に咲くカタクリの花の群落で有名ですが、山

全体に多様な動植物が生息する都市近郊の里山として貴重な存在です。ここで、「私たちみんなで森林を管理しています」というモデルを作っていきたいと思っています。森の運営は、市民から公募して発

足した「突哨山運営協議会」が計画を作り、それに基づいて旭川市が指定管理者に発注します。運営協議会が頭脳、市がエネルギー、指定管理者の僕らが手足の役割を果たします。保全と活用のバランスを取りながら、みんなが森とかかわっていくことが大事なことだと思います。

※ 〆〆先生は、東京大学北海道演習林の林長(責任者)を長く務めた高橋延清氏のこと。02年逝去。森林は環境を保全・維持する公益機能と、木材など林産物を生産する経済機能を持つ。正しい森林管理を行えば、2つの機能とも将来に向かってより発展するはずという「林分施業法」を提唱した。

6月号は、引き続き陣内雄さんの「人と森のかかわり」②をお届けする予定です。お楽しみに。



落葉広葉樹林に群生し、赤紫色の大きな花は美しく目立つことから、近年乱獲や盗掘などで激減している。花をつけるようになるまでには7~8年かかるといわれ、ずっと守っていきたい山野草のひとつである(陣内さん写真提供)

旭川市街にあり、カタクリの大群落が広がる
里山突哨山とつしやうさんの、指定管理者になったばかりの
NPO法人 森林再生ネットワーク北海道代表
陣内雄さん。「森をよく観察して、五感を使っ
て考えよう」と呼びかける陣内さんに、地元
産の材料で建てたエコロジィなお宅でお話
を伺いました。

（09年2月10日収録）

森とかかわる極意を知る

私はバブル期に設計事務所勤めてい
ましたが、ビルを造っては壊すというやり
方に疑問を感じていました。山梨県で有
機農法の農業をしている友人を手伝った
とき、山が荒れているため猿や猪が出て
きて畑を荒らすのを見て、これは何とか
しなくてはと思い始めました。C.W.ニコ
ルさんにも何度か会いに行き、ずいぶん
影響されましたが、特にニコルさんのとこ
ろで林業に携わる松木信義さんからは、

森とかかわる
極意を教わ
りました。

たとえば、

森の中でちよ
うと休憩してい
るときに、芽
生えを指して
木の種類を全
部教えてくれ
ました。そして、



まきストーブ1台で暖かい自宅でお話を伺いました

その芽を残して草刈りするのは。非常
に手間がかかりますが、「森の中ではボーッ
と座っていないで、作業にかけるときと同
じくらいよく観察して、五感を使って考
え抜く、そして感じる」と教えられました。
森林というのは、畑のようにコストをか
けて管理しきれぬものではありません。
ある部分ではコントロールして森をつく
っていくことも大切ですが、自然の持つ再
生力を上手に生かす。松木さんはそうい
うことの達人でした。彼は、炭焼き、養蜂、

キノコ採りをし、岩魚いわなを手
づかみにしたり、カワセミの
巣づくりのために池や土手
をつくったりとオールマイティ
な人です。

亡くなった富良野市の

東大演習林のどろ亀先生※は、現場の人
が森づくりの方針を決めるという改革を
されました。ドイツや北欧でもそうで
が、現場の人たちが森の力を豊かに高め
るように計画を立てて木を切るわけです。
ちゃんとした組織の中で、その現場の意
志決定を生かすシステムを作っています。

僕の住んでいるこの森も間伐していま
す。成長があまり良くない場所ですが、
切ることによって森が元気になる場所も
あります。

答えはひとつじゃない

「森をみる」の「みる」は、「見る」、「観
る」、「看る」が全部含まれていると思
います。答えはひとつではありません。

森とかかわり方や立場が、
一人一人違うからです。方法論
もさまざまあるので、「みた」あと
の処方が変わってくるのです。し
かも森の場合、5年後くらいから
少しずつ変化は見られるけれど、
それで良かったのかどうかはもっ



陣内 雄さんのプロフィール

’66年札幌市生まれ。東京芸術大学建築科卒。設計事務所勤務を経て’93年
から下川町森林組合で造林やもみの木オイルの開発を担当。’06年、同組合を
退職し、旭川市でNPO法人森林再生ネットワーク北海道を立ち上げる

人と森とのかかわり①

NPO法人

森林再生ネットワーク北海道

代表

陣内 雄さん
じんのうち たけし

ソコが聞きたい